

関西美術家平和会議新春講演会

心たたかかれて

講演 百瀬 邦孝氏

講演は自己紹介の後、30点程の作品を新作から古い順に映しながら進めました。

はじめに

「大地の唄―堆肥を撒く」(作品1)と同じく「土と同様に自然な生き方、無理のない生き方に惹かれる。最近の農業は無理が多い。セロリハウスは一日



作品1 「大地の唄―堆肥を撒く」 (2011年)

2万円の石油をだしている。年中、キウリ、トマトが当たり前の世の中は無理しているのではないかと。今、自給自足の暮らしの中で抵抗している。堆肥は溢れかたである。化学肥料では土地が痩せてしまう。植物性の堆肥が最もよい。

「土に立つ者は倒れず、土に活きる者は飢えず。土を護る者は滅びず」(安政6年生まれ)の農学者・横井時敬(東京農業大学学長)の言葉を大事にしている。農業をやいながら心を打つところ「土をたかかわる」思いを頭にこころおいて絵にしました。映画「七人の侍」が好きだ。最後に勝つのは百姓。哲学的にも人間の原点を見る思いがある。



作品2 「牛の叫び」(2012年)



野火(2011)

3・11から三年

アンデパンタン展搬入日の前日、東日本大震災が起きた。作品を日本美術会の9階の建物から全場へ運ぶ時のこと。怖い思いをした。エペーターが動かなかつた。心をたたかれたというより殴られた感じだった。国新美術館側は館電が開館できないといい、交渉会議をやり、出番入電話・ハカキによる連絡を、ようやく会期後半半に開催の運びとなった。

「牛の叫び」(作品2)

「透明な箱」(2012)3・11をどう描くか。一つの花を描くにも、3・11を経験した中で描くことになる。これを意識しようとして描いて絵に現れるという変化があった。

今まで土と牛を描いてきたがこの2つに3・11を思い重ねた。東北の被災地を3泊4日かけて車で走り抜くように回った。3・11の絵を描くことにしよう、鬼の角の目の目で全部見てみたかった。頭に焼きついたのは「何にもない」だった。

「鎮魂の飛翔」「黒い箱」(2011)「化石の田」(2012・3)制作のきつ



作品3 「夕暮れの記憶」(1992年)

かけは、宇宙飛行士の秋山さんの言葉から。「福島では7代先まで崇めてやる」と壁に書いて毎朝読んでいる友人がいる。それほど恨みは深いという言葉がある。

3・11を描くこと描くまじこと3・11を通して考えをせられた。何を描くのか。どう描くのか。絵で何が出来るのか。今も模索中である。記録的なもの、映像とか、音楽に対する絵は何か負けるので空しく感じた人もいたが、絵はもっと違った感性で描け、作りだしているのではないかと。告発や怒りでも、希望や悲しみ

だけでもなく自分の気持ちを模索し続ける事は無意味なことではない。精一杯の表現をしていきたい。

アンデパンタン展では大震災の支援を考えてきた。小品を売ってお金を支援することもあるが、絵の中味での支援とは違うところなのかな。おもしろいのは絵の中味で被災者も共有できないか。どう描くかよいかなどは課題だと思つた。

社会の出来事

「又暮れの記憶」(作品3)出来事の方が先に立ち、絵が